

瀬戸内のジャンヌ・ダルク

～キャラクターによる町興し～

農山漁村地域の過疎化が進む中で、「瀬戸内のジャンヌ・ダルク」と呼ばれる悲劇の姫を町興しの旗頭として活用した土地がある。本卒業研究では、その土地に伝わる日本で唯一現存しているという細身の胴丸と、女性でありながら戦い抜いた戦国時代の女性「鶴姫」の伝説を活用して町興しに成功した大三島の例を取り上げ、人口が減少していても、市の経済を維持、もしくは増加させるためにはどうすればよいのかを問いとして考えた。

調査方法としては、文献を活用して「観光」の概念について先行研究を行い、本論では鶴姫を活用したまつりを中心にどういった町興しを行ったのかについて、文献調査や市役所職員へのメールでのインタビューなどを行った。

その結果、先行研究では、この数十年での「観光」の考え方はインターネット普及の影響を受けていることや、町興しには「物語性」が重要視されていることなどがわかった。

インタビュー単体の結果としては、まつりを初めて開催する以前から観光ポスターに活用されたり、時代劇のヒロインになったりと活躍の場を広げていったことなどから、鶴姫伝説が世に出てから鶴姫を観光資源として活用しようとしていることがわかった。

以上のことから、単発でキャラクターだけを生み出すより、その土地に所以ある人物に「物語性」を付与して活用した方が、よりその土地の魅力的な部分をアピールするための説得力になるということがわかった。従来のイベントを継続して定期的を開催するより、知ってもらいきっかけとして新しいイベントに所以ある人物を活用してイベントや PR に活用するなど、大々的に盛り込まない方が観光客は増えるのではないだろうか。